

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

笹木（ささき） 中学校の陸上中長距離（きより）のエースだった辻一心（つじいっしん）は、あることから上郷（かみごう）第二中学校に転校し、走ることに熱意を失っていたが、あるきっかけで陸上部に入部した。以下は新しい仲間とともに初めて出場した秋の駅伝大会の様子である。

一心は、本部前のコール場所につくと、首を鳴らしながら左右に振（ふ）った。

女子の部が終わり、間もなく男子の部がスタートとなる。

百名超（こ） えのランナーたちは、せまい場所にひしめくようだった。これから、スタート地点である景勝島にわたる橋のたもとまで移動する。

視線を感じてふと目だけで見回すと、斜（なな）め前方から青紫（むらさき）色のランニングシャツを着たランナーが、射るような目を向けてきていた。

扶桑（ふそう）の金谷だ。

瞬間（しゅんかん）、にらみ合いのようになったが、金谷の方から視線を切るように目をそむけた。

先月の秋の市大会で、二年生でいきなり三位に入賞してきた一心のことを、金谷がマークしないわけではない。

移動が始まり、先頭の方から動き出した。去年の①セイセキによりスタート位置が決まるので、去年大会に出場していない上郷二中は後ろの方だった。

金谷の背中が動き出した。

「金谷に負けない走り」じゃなくて、おれは金谷に勝ちに行く。

胸の中の熱が体じゅうに広がっていく。

ランナー全員が橋のたもとにそろった。

右も左も海だ。

ささぎるものが何もない橋のたもとでは、東から吹いていると感じていた風も、前後左右どこからでも吹きつけてくるように感じた。公園内のあるところへすえ付けてあるスピーカーからは、まもなく始まる男子の競技の説明のアナウンスが流れていた。

「百二校が参加」とか「第一区は景勝島を時計回り」とか、ときおり語句が拾われたが、アナウンスはほとんど風に乗って海に流されていった。

一心は左肩（かた）にかかった黄色のたすきに手を当てた。計測用のチップが入っているというが、たすきは軽い。（1）何度も確かめるように触（ふ）れてみた。

このたすきをかけて、生まれて初めてチームで走る。

絶対にこのメンバーで県大会に行く。

秋の市大会の千五百メートルで、いったんは県大会への切符(きつぷ)を手に入れたのに、救済大会のせいで県大会いきを逃した、走哉(そうや)の顔が顔をよぎった。

おれが最大限かせいで、次につないでやる。

「間もなくスタートです」

最後のアナウンスだけが、耳に届(とど)いた。

体を揺(ゆ)らしたり、ほぐしたりしていた一区のランナー全員
の動きがびたりと止まり、静寂(せいじゃく)が広がった。

台の上に乗ったスターターが、ピストルを掲(か)げた。

ピストルの音が風を貫(つらぬ)いた。

百二名のランナーがいつせいにスタートした。

橋の幅(はば)は狭(せま)く、ランナーたちは並び順のまま走り出す格好となった。一心は首を横に出して、前に出ようと試みたが、きゅうくつすぎて動きが取れなかった。

同じ三キロという距離を走るのでも、競技場でトラックを走る三千メートルとは(2)全く違(ちが)うことを痛感した。スタートダッシュがかけられない。

練習ではここも走ったが、もちろん②コンザツしていたわけではない。予想を超える走りづらさだった。もう金谷の姿など全く分からない。おそらく最前列に位置して、ダッシュをかけているに違(ちが)いない。

ない。

レースのときに初めて体験したイライラだった。とにかく、この約八十メートルの橋をわたり切るまでは、何もできない。

「A」。およそ九分のレースはまだ始まったばかりだ。自分に言い聞かせるように、こわばりかけた③クビシジの力を抜いた。

橋を渡り切ったとたん、一心は大きく左側に出て、ぞくぞくとランナーを抜いていった。まだランナーが密集して走っているため、接触(せつしょく)しないように細心の注意を払い、ランナーの間をすり抜けていく。

水族館の建物をコーナーにして回ると、やがて先頭集団が見えてきて*安堵(あんど)した。

あの中に金谷がいるはずだ。

部員が多い中学はこちらの景勝島の方までやってきて、のぼりを立てて応援(おうえん)している。上郷二中の部員数ではそこまで手は回らないが、そんなことは気にならない。

たまたま景勝島に遊びにきた家族づれなのか、小さな子どもが、ランナーたちに手を振って声援を送っていた。

一心は先頭集団の最後尾(び)まで追い上げて、いったんそのスピードに身を任(まか)せた。

遊興施設(しせつ)のわきを抜けると、海にせり出した巨大ジェ

ットコースターが、目前にせまってきた。ジェットコースターのレールが、大空に大きな輪を描いている。あそこを超えたところで、約一キロ走ったことになる。

一心は少しだけペースをあげて、先頭集団のまん中あたりまで順位を上げた。

その集団からさらに少しだけ前に飛び出して、トップを切る金谷の背中が、はつきりととらえられた。

よし、まだがまんだ。出来るだけ今はおさえて、(3)ラストで爆発(ばくはつ)させてやる。

わざとそこに踏(ふ)みとどまって、様子を見た。

一心が上がつてこないのを気にしているのか、金谷がちらりと後ろをうかがうのが見えた。でも、集団にまぎれている一心のことは分からなかったはずだ。かすかに首をかしげるような④シグサをして前に向き直った。

二位のランナーが少し上げて、金谷の後ろにびたりと張り付いたときも、金谷はぴくりとして首を振った。そんな様子を一心は、集団の中盤(ちゅうばん)から観察した。

待ってろよ。

一心は、景勝島を一周して最初の橋にもどったとき、そこで一気に上げるつもりだった。橋は風が強く、だれもがスピードを落とす。そこを逆につくつもりだった。

やがて橋が見えてきた。遠く左前方には砂浜(はま)が広がっている。

橋にかかる直前、一心は左に出て、スパートをかけた。海の上を走る一本の細い道をすべるように上げていく。前後左右から風になぶられているのに、一心のフォームには(4)いつさい乱れがない。目前にせまった(5)青紫色のランニングシャツを、躊躇(ちゅうちよ)せずに抜(ぬ)き去った。

そのままスピードを維持(いじ)する。

橋を渡り切ったところに、上郷二中の黄色いのぼりがはためいていた。

「先輩(せんぱい)！ ファイト、でーす」

⑤ヨウリヨウ以上の大声を必死に出しているような、かすれ声の応援が飛んでくる。喉(のど)がさけてしまいそうな勢いだ。

茜(あかね)だろう。

そのおさげの女子中学生のかげから、タオルをぐるぐる回している人がいる。

「一心、がんばれー、がんばれー」

母さん、こんなところで。

上郷二中ののぼりを見つけて、茜といっしょに立っていたのか？ 一心は昨日、応援に行くという母さんに、来てでもいいけど声出して応援するな、とくぎを刺(さ)しておくのを忘れたことを後悔(こ)えていた。

うかい)した。

いつも頼んでいることだから、分かっているはずなのに、競技場という⑥カコまれた空間ではなく、海に近い解放感のあるコースに、つい母さんは叫(さけ)んでしまったのだろう。

ゆうべ母さんはしみじみと言った。

「あなたが、駅伝にでるとはねえ」

一匹狼(いっぴきおおかみ)で友達のいない息子に、仲間が出来たことを喜んでいる親の顔、みたいでなんだかむしろ心地在悪かったが、(6)母さんの気持ちが分からなくもない。

チームで走ることに燃えている自分に、自分自身が一番驚(おどろ)いているのだから。

後ろから足音が近づいてきた。振り向かなくても金谷だということとは、予想がつく。金谷がこのまますすぎ引き下がるわけがない。

一心はもし金谷が抜かしにきたら、競らずに前をゆずるつもりでいた。本当のスパートは最後の最後に取っておく。

案の定、金谷はするりと一心の横を抜き去った。しかし、一心は左右にかすかに揺れる金谷の背中に疲(つか)れを見た。秋の市大会の三千メートルの決勝で一位を駆(か)け抜けた、金谷のフォームとは明らかに違う。

浜辺側ではない海の公園の外側の遊歩道に入ると、ゆるやかな上り坂が続いた。金谷の背中の揺れはもっと顕著(けんちょ)になっ

た。左手の広場でサッカーを練習している、少年チームの姿が見えた。もうすぐ本部の⑦ウラテに出る。

このあたりまでくると、沿道にはびっしりのほりが立ち、応援の声がこだまし始めた。まもなく、海の公園の外側に出てモノレールの高架(こうか)下を走る。

そこにきたら、あと六百メートル。ラストスパートだ。

一心は高架下に入るなり、すぐにスパートをかけた。あつという間に金谷を抜き去り、三百メートル強の直線をぐいぐい飛ばす。追い風になつていて、予想以上に加速された。

抜き去る瞬間に聞こえた金谷の苦しい呼吸を聞いて、もうそれほど余力が残っていないことを確信した。金谷の足音が次第に遠のいていく。

二区目以降は、このモノレールの高架下をもっと走り、海の公園の西端(せいたん)にあるバーベキュー広場を回って折り返すことになるが、一区だけは、手前のところで浜辺側の遊歩道に続く道を回って折り返す。

まもなく、折り返した。

一心はコーナーワークに入ったとき、首を後方にねじって金谷の姿を確認した。すでに、十メートル以上の差がついている。

苦痛にゆがんだ金谷の顔が、ちらりと見えた。一心はすぐに前方を見すえ、コーナーを注意深く回った。浜辺側の遊歩道に入ると、

中継点まで残り三百メートル。

今度は向かい風となった。前に進もうとする力を押しとどめようとする風を破るように、腕(うで)を大きく振り出す。限界までピッチを上げた。

もつともつと、差を広げてやる。

テントスペースの前は、応援がさらにすさまじい。みんなで設置したテントのそばで、上郷二中の黄色いのほりが目に入った。⑧ホケツの健吾(けんご)の叫びが聞こえる。小池先生もさかんに手をたたいて応援している。

中継点が見えてきた。石井の姿が遠くに見える。

笹木中陸上部をやめてから、走りを退けたおれをここにもどしたのは、走哉だ。

あの晩、中央公園で練習のしすぎで倒れた走哉を見たときに、自分のなかで何かがくすぶり出した。

あの晩、というのは、おとなしい石井が一心の教室まで、わざわざやってきた日の晩のことだ。

「才能あるがゆえに、才能に走らされてたとか？」

そう言った石井の目を忘れない。メガネの奥(おく)の細い目は、少しもたじろぐことがなかった。そして、

「走哉には(7)辻にないものがある」

と言い放った石井の言葉を確かめに、あの晩、走哉を探しに中央

公園に自転車走らせたのだ。

何かをとことんまで好きになる才能――。

走哉にはそれがある。

もし、石井のあの言葉がなかったら、と考えるときがあった。

石井の性格が分かれば分かるほど、殻(から)に閉じこもり、近づいてくる者にはとげをあらわにしていた自分に対して、あの言葉をぶつけることにどれほどの勇気がいったことか、と思う。

石井の姿が大きくなってきた。

一心は肩にかかったすきを抜いて、右手に握(にぎ)りしめた。

「一心――」

大声とともに、石井が右手を上げた。

黄色いたすきが、一心の手から石井にわたった。

佐藤いつ子の文章による

*安堵 安心すること。

問一 ぼう線部①から⑧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線(1)「何度も確かめるように触れてみた」ことについて、なぜ一心はこのような行動をとったのですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問三 波線(2)「全く違うこと」とはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 大勢の選手がひしめき合い、スタートダッシュがかけられないこと。

イ トラック三千メートルと公園三キロでは距離が全く異なること。

ウ スタートするときに、ほかの中学校の選手から注目されてしまうこと。

エ 競技場と公園では風や天気などのいきまが全く異なること。

問四 一 A 一に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア おどろくな イ あわてるな

ウ いそがねば エ なげだすな

問五 波線(4)「いつさい乱れがない」ことから、一心はこの時どのような状態だったと考えられますか。適当なものを次からすべて選び、その記号を書きなさい。

ア 一心はまだ自分の本気を出して走っていない。

イ 一心は自分のペースでレースを進めている。

ウ 一心にはレースが簡単すぎて退屈(くつ)している。

エ 一心は走り続けたことで疲れ切っている。

オ 一心はスパートをかけたがまだ疲れていない。

問六 波線(3) 一心は「ラストで爆発させてやる」と考えました

が、その理由を示す連続した三つの文を文章中から探して、はじめとおわりの七字を書きなさい。

問七 波線(5)「青紫色のランニングシャツ」とはだれのことですか。文章中から五字で探して書きなさい。

問八 波線(6)「母さんの気持ちも分からなくもない」のはどうしてですか。六十以上七十字以内で説明しなさい。

問九 波線(7)「辻にないもの」とはなんですか。文章中から二十以上以内で探して書きなさい。

問十 この文章を「一心がする物語。」または、「一心がなる物語。」という一文でまとめなさい。ただし、「」に入る言葉は「する」「なる」をふくめて三十字以上四十字以内とします。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

踏(ふ)まれながら生きることが、多くの人が雑草に持つイメージだろう。

中でもオオバコという雑草の戦略は秀逸(しゅういつ)である。

オオバコは、舗装(ほそう)されていない道路やグラウンドなど、踏まれやすい場所によく生えている。じつは、オオバコは踏まれやすい場所に好んで生えているのである。

オオバコは競争に弱い植物なので、他の植物が生えるような場所には生息できない。そこで、他の強い植物が生えることのできないような、踏まれる場所を選んで生えているのである。

オオバコは(1)踏まれに強い構造を持っている。

オオバコの葉は、とても柔(やわ)らかい。硬(かた)い葉は、踏まれた衝撃(しょうげき)で傷つきやすいが、柔らかい葉で衝撃を吸収するようになっているのである。しかし、柔らかいだけの葉では、踏まれたときにちぎれてしまう。そこで、オオバコは葉の中に硬いすじを持っている。このように、柔らかさと硬さをあわせ持っているところが、オオバコが踏まれに強い秘密である。

茎(くき)は、葉とは逆に外側が硬くかなか切れない。しかし、茎の内側は柔らかいスポンジ状になっていて、とてもしなやかである。茎もまた硬さと柔らかさをあわせ持つことによって、踏まれに

強くなっているのである。

ヘルメットが、外は固いが中はクッションがあつて柔らかいのと、まったく同じ構造なのである。

「柔よく剛(ごう)を①セイす」という言葉がある。

見るからに強そうなものが強いとは限らない。柔らかく見えるものが強いことがあるかも知れないのである。

昆虫(こんちゅう)学者として有名なファーブルは、じつは「ファーブル植物記」もしたためている。その植物記のなかで、ヨシとカシの木の物語が出てくる。

ヨシは水辺に生える細い草である。ヨシは突風(とつふう)にたおれそうになったカシの木にこう語りかける。カシはいかにも②リツパな大木だ。しかし、ヨシはカシに向かってこう語りかける。

「私はあなたほど風がこわくない。折れないように身をかがめるからね」

日本には「(2)柳(やなぎ)に風」ということわざがある。カシのような大木は頑強(がんきょう)だが、強風が来たときには持ちこたえられずに折れてしまう。ところが、細くて弱そうに見える柳の枝は風になびいて折れることはない。弱そうに見えるヨシが、強い風で折れてしまったという話は聞かない。柔らかく外からの力をおかすことは、強情(ごうじょう)に力くらべをするよりもずっと強いのである。

柔らかいことが強いということは、若い読者の方にはわかりにくいかも知れない。正面から風を受け止めて、それでも負けないことこそが、本当の強さである。ヨシのように強い力になびくことは、ずるい生き方だと若いみなさんは思うことだろう。

しかし、風が吹（ふ）くこともまた自然の③セツリである。風は風で吹きぬけなければならぬ。自然の力に逆らうよりも、自然に④シタガって自分を活（い）かすことが大切である。

この自然を受け入れられる「柔らかさこそ」が、（3）本当の強さなのである。

オオバコは、柔らかさと硬さをあわせ持つて、踏まれに強い構造をしている。

【A】、オオバコのすごいところは、踏まれに対して強いというだけではない。

オオバコの種子は、雨などの水にぬれるとゼリー状の粘着（ねんちやく）液を出して膨張（ぼうちよう）する。そして、人間の靴（くつ）や動物の足にくっついて、種子が運ばれるようになっていくのである。オオバコの学名は *Plantago*。これは、足のうらで運ぶという意味である。タンポポが風に乘せて種子を運ぶように、オオバコは踏まれることで、種子を運ぶのである。

よく、道にそってどこまでもオオバコが生えているようすを見かけるが、それは、種子が車のタイヤなどについて広がっているから

出すものが多い。

草むしりをして、土がひっくり返されると、土の中に光が差しこむ。光が当たるといことは、ライバルとなる他の雑草が取りのぞかれたという合図でもある。そのため、地面の下の雑草の種子は、チャンス到来（とうらい）とばかりに⑤ワレサキにと芽を出し始めるのである。

また、きれいに草取りをしたと思っても、それを合図にたくさん雑草の種子が芽を出して、結果的に雑草が増えてしまうのである。草刈りや草むしりは、雑草を⑥ジョキヨするのための作業だから、雑草の生存にとっては逆境だが、雑草はそれを逆手に取って、増殖（ぞうしょく）してしまうのである。何という【E】一存在なのだろう。

「ピンチはチャンス」という言葉がある。逆境を逆手に取って利用する雑草の成功を見れば、その言葉は説得力を持つて私たちに響（ひび）いてくることだろう。

ピンチとチャンスは同じ顔をしているのである。

生きていく限り、全ての生命は、何度となく⑦コンナンな逆境に直面する。雑草は自ら逆境の多い場所を選んだ植物である。しかし、逆境のまったくない環境（かんきよう）などあるのだろうか。雑草がこれだけ広くはびこっているのを見れば、自然界は逆境であふれ

なのだ。

【B】、オオバコにとって踏まれることは、耐（た）えることでも、克服（こくふく）すべきことでもない。もはや④踏まれないうとこまるくらいまでに、踏まれることを利用しているのである。

「逆境をプラスに変える」というと、「物事を良い方向に考えよう」という*ポジティブシンキングを思い出す人もいるかも知れない。

しかし、雑草の戦略は、そんな気休めのものではない。もっと具体的に、逆境を利用して成功するのである。

【C】、雑草が生えるような場所は、草刈（か）りされたり、耕されたりする。ふつうに考えれば、草刈りや耕起は、植物にとっては生存を危ぶまれるような大事件である。しかし、雑草は違（ちが）う。草刈りや耕起をして、茎（き）がちぎれちぎれに切断されてしまうと、ちぎれた断片の一つ一つが根を出し、新たな芽を出して再生する。【D】、ちぎれちぎれになったことによつて、雑草は増えてしまうのである。

また、きれいに草むしりをしたつもりでも、しばらくすると、一斉（いつせい）に雑草が芽を出してくることもある。じつは、地面の下には、膨大（ぼうだい）な雑草の種子が芽を出すチャンスがかがっている。一般（いっぱん）に種子は、暗いところで発芽する性質を持つているものが多いが、雑草の種子は光が当たると芽を

ていることがわかるだろう。

逆境に生きるのには雑草ばかりではない。私たちの人生にも逆境に出くわす場面は無数にある。そんな時、私たちは道ばたにひっそりと花をつける雑草の姿に、自らの人生を照らし合わせてセンチメンタルになるかもしれない。しかし、雑草は逆境にこそ生きる道を選んだ植物である。そして逆境に生きる知恵（ちえ）を進化させた植物である。

けつして演歌の歌詞のようにしおれそうになりながら耐えている訳でもないし、*スポ根まんがの主人公のようにただ歯を食いしばつてがんばっているわけでもない。雑草の生き方はもつとたくましく、そしてしたたかなのである。

「（5）逆境は敵ではない、味方である。」これこそが、雑草の成功戦略の⑧シンコッチョウと言えるだろう。

幾多（いくた）の逆境を乗り越えて雑草は生存の知恵を獲得（かくとく）し、驚異（きょうい）（きょうい）的な進化を成しとげた。逆境こそがかれらを強くしたのである。そして、逆境によって強くなれるのは雑草ばかりでない。私たちもまた逆境を恐（おそ）れないことできつと強くなれるはずなのである。

「（6）ピンチはチャンス。」

ゆめゆめ逆境を恐れてはいけないのだ。

稲垣栄洋の文章による

*ポジティブシンキング 前向きな物の考え方。

*スポ根 スポーツ根性。

問一 ぼう線①から⑧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線(1)「踏まれに強い構造」とは、どのような構造ですか。二十字以上三十字以内で書きなさい。

問三 一 A 一から D 一に入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア A たとえば B しかし C こうなると D つまり
イ A しかし B つまり C こうなると D たとえば
ウ A しかし B こうなると C たとえば D つまり
エ A こうなると B つまり C しかし D たとえば

問四 波線(2)「柳に風」と同じような意味の四字熟語として最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 花鳥風月 イ 一石二鳥
ウ 牛飲馬食 エ 馬耳東風

問五 波線(4)「踏まれないとこまる」のはなぜですか。最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア せつかくの踏まれに強い構造がムダになってしまうから。
イ 踏まれることで、靴やタイヤに種子をつけて運ぶから。

ウ 逆境に耐えて生きるといふ筆者の主張に合わなくなるから。

エ 踏まれには強くとも、草刈りには対応できない構造だから。

問六 波線(3)に「本当の」という言葉が用いられている理由を、三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問七 波線(5)を言いかえた部分を探し、「こと」に続くように本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問八 一 E 一に入る言葉として最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア しつこい イ 美しい
ウ みにくい エ 息苦しい

問九 波線(6)「ピンチはチャンス」に当てはまる例として最も適当なものを、次から選び、その記号を書きなさい。

ア オオバコの種子が水にぬれると粘着液を出して人間の靴や動物の足にくっつくこと。

イ 強風が来たときに、カシのような大木は折れてしまうが、細いヨシは風になびいて折れないこと。

ウ ヘルメットが、衝撃を吸収するために外は固いが中は柔らかい構造であること。

エ 草刈りの後にちぎれちぎれになった雑草の茎の断片それぞれから発芽し、数を増やすこと。

問十 この文章の筆者の主張を、五十字以上七十字以内でまとめなさい。

[illegible][illegible]

受験番号